

# みほとけは

## ■ 楽曲データ

歌詞：仲野良一 作詞

楽曲：信時潔 作曲

発表：大谷楽苑 1948年

初演：大阪毎日会館 1948年

初出：『讃仰歌』 大谷楽苑 1948年

管理番号：M1895

## ■ 創作の経緯

大谷楽苑より「讃仰歌」第1番として発表。歌詞は公募による。

## ■ 校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第2巻収録

底資料：『讃仰歌』 大谷楽苑 1948年

比較資料：作曲者自筆譜（東京藝術大学附属図書館所蔵）

校訂の詳細：特記事項なし

## ■ 解説

筆者がこの仏教讃歌《みほとけは》に出遇ったのは、高校生になったばかりの頃でした。仏教讃歌を歌う合唱団「コーロサンガ」で混声合唱曲として歌ったのです。曲の最後がト短調からト長調の主和音に変わって終わるのが、とても新鮮に響きました。この歌の持つ宗教的深みは、理解できていなかったと思いますが、歌い込むほどに人びとをひきつける不思議な魅力を持つ讃歌であることは、かすかに感じていたようです。戦後作曲された仏教讃歌のなかでも、最も多く演奏され、人びとに感銘深く歌われた名曲のひとつということが出来ます。

## ◆ 作詞者・作曲者について

作詞の仲野良一は1912（大正元）年京都府に生まれ、大谷大学文学部を卒業。大谷女子高校の校長や大谷大学の講師などを務めました。他の作品には《光はみちて》《さみどりの空に》などの讃歌があります。

作曲の信時潔（1887～1965）は少年の頃から讃美歌に親しみ、東京音楽学校（現・東京芸術大学音楽学部）ではチェロを学び、研究科では作曲・指揮・和声学などを学びました。のちにドイツへ留学し、帰国後は母校の教授となり、作曲を講じました。

山田耕筰さんと共に、日本における芸術歌曲のジャンルを確立しました。山田の華麗さに比べると、作風は質実簡素で、ドイツ古典派の手法のなかで素朴な歌曲を多く書きました。歌曲集『沙羅』などは、今でも多くの人びとに歌われています。

#### ◆歌い方について

- ①「心をこめて」という指示が、最初にあります。何回も歌ってみないと、どのような心が分かりませんので、詩に共感し納得のゆくまで練習しましょう。
- ②詞にいわれる「みほとけ」は、阿弥陀如来さま。「み名よべば」とは、南無阿弥陀仏とお念仏申すことと、ご理解いただければよいかと思えます。
- ③あまり遅くならないように、テンポを守って歌いましょう。
- ④歌の冒頭（2・3小節目）、連続する「レ」の音に細心の注意をはらいましょう。ふたつめの「レ」が下がりがちです。
- ⑤4小節目4拍目から5小節目にかけての「レ」→「シb」、6小節目4拍目から7小節目にかけての「ソ」→「ド」が、なかなかうまく取れません。ピアノと一緒に弾いて、和音のなかで正しい音程を覚えましょう。
- ⑥7小節目から10小節目にかけて、高い音が続きます。喉をゆるめて、細かな音程を正しく歌えるようにしましょう。
- ⑦10小節目4拍目にアクセント記号が付いていますが、物理的にただ強く歌うのではなく、内面を表わすことに心をそそぎましょう。
- ⑧17小節目、フェルマータ記号の付いた音は、伴奏の和音が長調の明るい響きに変わるのをよく味わって終わらしましょう。

#### ◆用途など

報恩講や追悼会などで歌ってみてはいかがでしょうか。きっと如来さまの恩徳が、深く身にしみることでしょう。

原曲は混声四部合唱です。楽譜は『聖歌・讃歌集』第2巻をご覧ください。二部合唱版は、『讃歌集 二部合唱』第5巻に掲載されています。

解説執筆：大分哲照（御堂演奏会指揮者 福岡教区西嘉穂組明圓寺住職）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No. 27（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第152号収録）を加筆・修正のうえ、転載。

Copyright: Jodo Shinshu Hongwanji-ha Research Institute. All Rights Reserved.